

瓊筵此日集豪雄。胸列星辰氣吐虹。美酒戲斟金谷罰。新詩
盡壓玉臺風。雪花迷白梅花外。春色搖黃柳色中。渭北任他
柳樹阻。歎心樂事在江東。

此詩白石より事件給候間、寫して進申候。殊の外出来に候とて白石感被申候。なる程其趣にて英才可畏に御座候。

一、甲午元日。作二首呈滄浪先生栢右。伏乞郵政。試毫

蘭洲藤子儀村上様

城上斗回柄。乾坤一夜新。蒼龍東海曉。黃鳥上林春。過日迎
芳艸。和風動綠蕪。五雲多氣象。喜作太平人。

早朝作

同上

金闕雲飛曙色開。青郊雨歇暖正回。春浮江海晴光動。日繞
樓臺淑氣催。玉佩聲高鸚鵡集。仙簫調和鳳凰來。兩朝何幸
忝恩澤。欲獻南山壽一杯。

一、雨後與諸君共賞堂前紅梅。

白石

春寒雨浴曉妝成。紅汗沾衣宿露明。錦帳蒸雲香欲熟。朱簾
捲月影俱清。尊前扶起踏池夢。笛裏吹殘玉塞聲。應是漢宮
人自妬。豐肌偏向掌中輕。

第七句。後改妬殺趙家雙姊妹

第七句春寒雨浴は前夜よりしに付、長恨歌の春寒賜浴
の聲を被用候。香欲熟は季賀が詩に、春雲熟と申事有
之故事を被用候。尊前扶起、笛裏吹殘の一聯、白石の
面目にて候。結聯は趙飛燕が故事にて候。第二句紅汗
沾衣も趙飛燕が故事と覺え申候。

一、再用紅梅韻重求諸君賜和。

羅浮春夢恍難成。青鳥啼殘落月明。色剪紅水浸骨冷。香燼
絲雪透肌清。瓊琴應復求新譜。檀板何須按舊聲。莫厭天
寒頻勸酒。仙衣原自六珠輕。

瓊は赤玉なり、紅梅に應ず。琴曲に梅花引有之。第六句
は李白清平調の題注のことを被用候。

一、和白石翁紅梅之韻

鳩巢

東閣梅開似畫成。絳英顆顆點枝明。醜顏須與衆同醉。水魄
不妨吾獨清。錦繡機中裁作字。珊瑚斧下碎無聲。可憐穠艷
稱春意。還勝梨花吹雪輕。

珊瑚斧下は石崇が故事。穠艷稱春は座上にて、紅梅は白
梅に劣れりと云人有之候ゆゑ其申候は、其通りに候へ共

紅梅は春には相應の色と申候へば、白石是を感じ名旨と
被申候。白梅は雪中に相應にて候。春氣艶陽の節は、紅
梅相應に候。別々可賞由被申候に付、其意を此結聯に申
のへ候。

又

楊柳樓前絲未成。傍看玉樹獨分明。色迎華髮客羞老。香
透絲紗人共清。紅粉休誇宮裏態。朱絃翻作曲中聲。却疑春
到桃源早。誤使漁舟月下輕。

第一句紅梅の側に楊柳一株有之候故如斯申候。結句は滄
浪と申より申候。

高和さて御出来被成候。同醉獨清よろしき事也。珊
瑚碎、驚人の句にて候。素花吹雪輕もよろしき事にて御
座候。此篇御あいなつ奉奉存候。朱絃翻聲、漁舟をして
輕からしむ、いづれも絶妙に候。某今朝田子都子
に和つかはし候下書懸御目候。これはこなたのひかへに
て候。御覽ののちいつにても御返し被下可候。白石

一、白石先生用和故事即席賦成

上キキ即也。或人出此二字以乞和。特用和故事べきの由を云。琴奇即席賦成のよし、白石二十一歳の時と云。

誰下瓊茅初試雪。紛如五節舞容閑。一痕殘月芳溱里。千片
落花滋賀山。提劍膽臣尋虎跡。捲簾清氏對龍顏。貧梅截盡
留貧意。濟得隆冬無限艱。

誰下瓊茅は日本記に見えたり。五節舞は五節舞姫の事。

殘月芳溱里は、吉野の里にふれる白雪の事。落花滋賀山
は花の小吹の志賀の山越の事。膽臣虎跡は雪中に跡をと
めて離を報する事。清氏龍顔は清少納言捲簾の事。結聯
は鉢木の事。

一、藤相公詩白石次韻

潮沫凝成滄海東。白雲白雪幾重々。天工削畫蓮花樣。君子園
中第一峰。

高捲與飛天一方。香爐峯雪應無光。銀篝烟斷海風冷。天女
來懸雲錦裳。

右二首正親町殿、先年江戸御下の時分、道中にて富士の
詩にて候。白石其時分東叡山へ供奉にて、あれに還御を
待申候間に、上野にて此韻を用ひて賦申候よしにて、左
の二首被申聞候。おもしろく候間、書附候て進申候。

星下天門度海東。梵王宮殿五雲重。雙林樹影連仙詠。七寶